

第2問

次の文章は、遠藤周作「影に対して」の一節である。小説家志望の勝呂すくろは、現在、翻訳の仕事で生計を立てている。そのなかで、彼は母のことを思い出しては現在の自分の生き方について考えるようになる。本文は、戦前の中国大陸で過ごした少年時代に病気で入院したときの回想から始まっている。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 45)

「夏休みがすぐだから、学校をそんなに休まないで、よかったね」と母は言った。「新学期がくればまた登校できるわよ」

そんなに長く入院をしていなければならぬのかと尋ねると、母は困ったような表情でうなずいた。だが、真実、勝呂は早く治るよりはこのまま入院が長びくことを心で願っていた。病気のおかげで、自分が母を独占できたことを子供心にも知っていたからである。ヴァイオリンから母を奪うためには、彼が治らぬことが必要だった。窓には幾つかの植木鉢が並べられ、そのなかには母の好きなゴムの樹きもあつた。だがある日、熱のひいた彼がうたた寝からふと眼めを開けると、椅子に腰かけた母が、こちらに気がつかず、膝の上に肱ひじをつくようにして、左手の指をしきりに動かしていた。A 彼女が今、何をしているのかがわかつた

時、勝呂の心には寂しさと怒りに似た気持きもちとが同時にこみあげてきた。彼は汗でぬれた寝巻を変えてくれと母に怒鳴り、着変えさせてもらったあともこの寝巻は気に入らぬと言いつづけた。母は最後には怒り部屋を出ていった。

(注1) 父の姉夫婦が奉天ほうてんから大連だいにんに移ってきたのはこの入院中である。勝呂が二十数年たった今でも憶おぼえていることは、病院で、伯

母と母との間で行われた言い争いである。はじめはいかにも親しげに話しあっていた二人が、突然、口論をはじめた理由は子供の勝呂にはよく掴つかめなかったが、伯母は金齒のいっぱいはいった口をとがらせながら、

「ヴァイオリンもいいけど、女はまず家をまとめるのが仕事だと思っけどね」

この嫌味に母がどう答えたかは憶えておらぬ。記憶にあるのは、膝の上でハンカチを握りしめている彼女の手が震えていたことである。

「この子が病気になったのも」伯母はたたみかけるように「あんたが音楽ばかりにかまけて見てやらなかった為ためじゃないのかい」

この言葉を父が伯母に言わせたのか、それともそれは伯母自身の前からの考えだったのかどうかはわからない。母がこの言葉にはじめて、自分を他人がどう見ているかに気づいたのか、わからない。とに角、その真夜中、勝呂は額にあの指を感じて眼をさました。母は泣いていた。しかし彼はなにも気づかぬふりをして寢床のなかで軀を硬くしていた。

退院したあとも、母はヴァイオリンを弾かなくなった。母は普通の母親と同じように、学校から戻る勝呂にはホットケーキをよく作ってくれた。ホットケーキにはドリコノ(注2)を沢山かけてあった。

三ヶ月前に翻訳した推理小説が、考えていたよりもずっと売れた。売れたと言っても、もちろんベスト・セラーなどに到底入るほどではないが、一、二の週刊誌が書評にとりあげてくれると、売行きが早くなりはじめた。彼の翻訳料は買とり制だったから版を重ねても支払額は一定していたが、出版社では気をきかせて二万円ほど別に送金してくれた。

妻と子供をつれて街に出た。祭の日で街は人ごみで溢れていた。警官が沢山仕々に立って、歌を合唱しながら歩いてくるデモの行列を整理している。

デパートの屋上で子供を遊ばせた。回転する大きなコップに親子三人で乗った。ゆっくりとのぼっていく飛行機にも乗った。飛行機の中からは灰色の東京の街がどこまでも見渡せた。

妻のために帯と、自分のために外国製の万年筆を買うと、もらった二万円はすぐなくなってしまった。惜しいわ、帯なんかいらなかったのにと、妻は半ば嬉しそうな、半ば残念そうな顔でしきりに呟いたが、勝呂は、ケチケチするなよ、前から欲しがっていたんだろと答えた。

食堂で子供にはホットケーキを、妻にはアイスクリームをとってやり、自分は麦酒を飲みながら窓の下を見おろすと、もうデモの行列は終って、その代り沢山の家族づれが歩いているのが見えた。幸福感に似た感情がゆっくりと胸に湧いてくる。

「親子三人で」と妻はクリームをなめながら「こんな贅沢ぜいたくしたなんて始めてね」

「たまにはいいさ。これから、時々、やろうよ」

答えながら彼は心の中で、こういう生活がなぜ悪いんだと急に考えた。なぜ今更、小説を書く必要があるんだ。俺はこうして結構やっているじゃないか。なぜこの結構な毎日を自分で恥ずかしがる必要があるんだと思った。その時、まるで残酷な悪戯いたづらのように勝呂の頭にあの母の死顔が浮かんできた。

40

長い間、もう母はヴァイオリンを弾かなかった。茶褐色の楽器は弱音器(注3)や弓と一緒にケースの中に入れて応接間の隅にいつも転がっていた。母のいない留守、勝呂はおそろおそろそのケースをそっと開いて見ることがあったが、絃げんをはずされたヴァイオリンはひどくわびしくみえ、弓の先に老婆の白髪のような線がついていた。

昔とちがつて母は満人(注4)の女中を指図して食事を作ったり、庭に花を植えたり、彼の勉強を手伝ってくれる。あの頃、勝呂には母の寂しさを感じるよりは自分の手に戻った彼女との生活がただむしように嬉しかったのを憶えている。

45

B 父も満足そうだった。日曜日、彼は花壇の前にしゃがんで何時間も草をぬいたり、チュウリップの苗を植えていた。外では満人の物売りが籠かごにどっさり入れた海老えびを片言の日本語を使いながら売りにくる。庭のアカシヤに真白い花が咲き、勝呂はその花房を母からもらった香水瓶の中に入れて遊んだ。本屋では内地より一週間ほど遅れて少年倶楽部(注5)が届く。学校から戻ると彼はそれを見ながら日が暮れるまで「冒険ダン吉」や「日の丸旗之助(注6)」の漫画を書く。

50

「平凡が一番いい」その頃から父は何処どこの本で読んだのか、しきりにその言葉を繰り返しかえした。「家族の誰も病気せず、何の風波もないのが倖しあわせというものだ。平凡を笑う者は平凡に仕返しされる。人間、高望みをしてはいけない」

その言葉を、母を諭す意味で父がどこかの本から探してきたのかどうかはわからない。その言葉を言われて母がどのような表情をしたかも憶えていない。

55

もちろん、父と母との間に小さな諍いさかいがなかったわけではない。たとえば、月の終りになると父はソロバンを片手に、母のつけた家計簿けいぼの頁ぺいをめくりながらしきりに珠たまをはじく。それから小声の、しかし、ぐずぐずした説教が始まる。母は黙ってそれを聞いている。説教がすむと、心配そうに二人を見つめている勝呂に母は **a** 哀かなしそうな微笑をかける。そういう、小さな諍いさかいを

除いては、二人は世間並みの夫婦の落ついた生活を営んでいるように子供の眼にも見えた。

大陸性の大連は夏と冬とが一番長い。大連の夏のことを考える時、勝呂はきまつて強い直射日光にさらされた大広場や西公苑(注7)

(注8)

を思いだす。葉の萎えたアカシヤの下で上半身裸の苦力たちが死んだように地面にころがり眠っている真昼、街にはほとんど人

影もなく、辻々には客のいない馬車の馬だけが蠅を尾で追いながらしきりに毛のぬけた足を動かしている。そんなある日、母は

日傘をさしたまま勝呂をつれて黙って歩いていった。黙ったまま、どこまでも歩いた。勝呂が時々、話しかけても、**b** 哀しそ
うなずくだけで返事をしなかった。どこへ行くのと、訊ねても首をふるだけだった。やっとミルク・ホールで彼にアイスク

リームをたべさせながら、自分はさじを取りあげようとせず、何かを考えこんでいた。

「どうしたの」勝呂はクリームを食べるのをやめて母の顔を見あげた。「元氣ないよ。病氣なの」

心配しなくていい、と母は首をふり **c** 哀しそうに微笑した。帰りがけ、彼女は浮袋を買い、次の日曜日もし晴れていたら海

水浴に連れていくと約束した。

こういうような生活が一年つづいた。誰も母がヴァイオリンを弾かなくなったことを不思議には思わない。彼女が普通の主婦

と同様にこまごまとした家事に没頭したり、勝呂の宿題を手伝っているのを見ても、変ったと言う者もいなくなった。父がその

ころ勤めていた満鉄の社員たちが来れば、母は、夜遅くても、満人の女中を手伝わせて、酒を幾度も運んだ。客が酔って大声で

軍歌を歌う時、母はあ **d** 哀しそうな微笑でじっとその姿をみつめていた。

母の音楽学校時代の友人であるSさんが大連にやってきたのはその年の冬だったろうか。その女性は既にヴァイオリンの奏者

として、日本でも有名な人だったから、母がかつて演奏会をひらいた青年会館は満員だった。内地の匂いに飢えている満鉄の若

い社員たちがつめかけたからである。演奏会が終ったあと、そのSさんは勝呂の家に来て泊った。勝呂は母とその女性との間に

寝かされたから、闇のなかで二人のとり交す会話をじっと聞いていた。

「あなたがねえ……、こうなるとは思わなかったわ」とSさんは、うつ伏せになり煙草に火をつけながら言った。「もう弾かな

いの」

「駄目よ。指がなまっちゃって」

「倅せなの」

充分、満足していると母は、はつきりと答えた。闇にうごく煙草の赤い火口ひぐちをみつめながら、勝呂は嬉しい気持ちでその返事を聞いていた。今、考えれば、あの母の返事は音楽学校時代の友人への対抗心から出たのだろうか、Cまだ小学校五年生だった彼には裏にある感情まで到底、みぬくことはできなかったのである。

(注) 1 奉天から大連——奉天は中国遼寧省りょうねいの省都・瀋陽しんやうの旧名。大連も同省の都市名。日露戦争後から第二次世界大戦終戦まで、日

本の実質的な統治下にあった。

2 ドリコノ——澄んだ黄金色で、甘みの強い滋養飲料。昭和初期に大流行した。ここでは原液が使用されている。

3 弱音器——楽器の音量を抑制したり、音色を変えたりする装置。

4 満人の女中——満人は、「満洲国」設立などで大陸に侵出していた当時の日本が、現地中国人を広く呼んだ言い方。見下した語感をもつて使われる場合があった。女中は、雇われて家事をする女性に対する当時の呼称。

5 内地——終戦以前に海外で統治していた土地(外地)に対して、日本本国の領土のことを指す。

6 少年倶楽部——月刊少年雑誌。「冒険ダン吉」や「日の丸旗之助」は連載されていた漫画作品。

7 大広場や西公苑——大連の広場と公園の旧名称。

8 苦力——荷役などに従事する労働者。

9 ミルク・ホール——牛乳を中心にパンなども扱う軽食店。

10 満鉄——南満洲鉄道株式会社の略称。

問1

傍線部A「彼女が今、何をしているのかがわかった時、勝呂の心には寂しさと怒りに似た気持とが同時にこみあげてきた。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①、④のうちから一つ選べ。解答番号は

11。

- ① ヴァイオリンの練習と子供の看病とをなんとか両立しようとする母の様子を見て、母の足手まといになっていることを後ろめたく思うとともに、自分の気持ちをわかってくれない母に対し憤りを覚えたということ。
- ② ヴァイオリンを弾いているような仕草をする母の様子を見て、母を独り占めできないことを切なく思うとともに、自分が病気のときでさえヴァイオリンのことを忘れられない母に対しいらだちを覚えたということ。
- ③ ヴァイオリンへと気持ちに向かい始めた母の様子を見て、入院生活が終わると母を占有できなくなることを悲しく思うとともに、母のあらゆる所作に難癖をつけて八つ当たりしたいという衝動を覚えたということ。
- ④ 看病の合間を縫ってまでヴァイオリンの練習をしようとしている母の様子を見て、楽器にすら勝つことができない自分を哀れに思うとともに、自分から母を奪ったヴァイオリンに対する憎しみを覚えたということ。

問2

傍線部B「父も満足そうだった。」とあるが、そのように見えたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の

- ① ～ ④ のうちから一つ選べ。 解答番号は 12。

- ① 父は「苗を植え」(45行目)たり植栽したりすることに喜びを感じ、母に対しても庭いじりに満足をするような慎ましい生き方を求めており、その結果、母は草花に愛情を注ぐことを日課とするようになっていたから。
- ② 父は「家族の誰も病気せず」(49行目)に過ごすことが幸せだと信じ、母に対しても音楽のせいで心身に支障をきたすことがないように求めており、その結果、母は勝呂や家族の健康のために力を尽くしていたから。
- ③ 父は「平凡を笑う者は平凡に仕返しされる。」(50行目)と考え、母に対してもヴァイオリンに没頭して家族を顧みない態度をあらためることを求めており、その結果、母はその求めに応じる日々を過ごしていたから。
- ④ 父は「人間、高望みをしてはいけない」(50行目)ということを重視し、母に対してもヴァイオリンでの成功を望まないように求めており、その結果、母は演奏の練習を休止し家族との生活に感謝しようとしていたから。

問3

55行目から69行目に見られる波線部a「哀しそうな微笑をかける」b「哀しそうにうなづく」c「哀しそうに微笑した」d「哀しそうな微笑でじっとその姿をみつめていた」を含む各場面での母の様子についての説明として最も適当なものを、次の

- ① ④のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

① 波線部aを含む場面は、不安げに見つめている勝呂の存在に気がついているところではあるが、母が父の小言に対して実は不満を抱いていることを勝呂にさとられないように、気をそらそうとしている。

② 波線部bを含む場面は、話しかけてくる勝呂にころうじて反応を示しているところではあるが、日頃の抑圧された状況のせいで勝呂の存在まで腹立たしく感じてしまうほどに、追い詰められている。

③ 波線部cを含む場面は、母を思う勝呂の気遣いに応えようとしているところではあるが、安心させたいという思いとは裏腹にうまくふるまえずに、息子の憂慮を確信へと深めさせてしまっている。

④ 波線部dを含む場面は、勝呂に見られていることを認識しているとは言えないところではあるが、求められる役割を果たしてきたなかで染みついた表情に、積み重なった辛さがにじみでてしまっている。

問 4

傍線部 C「まだ小学校五年生だった彼には裏にある感情まで到底、みぬくことはできなかったのである」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。 解答番号は

14。

① 子供の頃の勝呂は、母がヴァイオリンをやめて自分や家族との時間を優先する生活に満足していると答えたことを嬉しく感じていた。しかし、勝呂が本意ではない人生を歩んでいる今は、母の心情に気づけなかった自分に対する未熟さを痛感するとともに、その言葉が友人への反発から出たものであったことを理解している。

② 小学生だったときの勝呂は、母が当時の生活に充分幸せだと言いつつたことを何の疑いも持たず素直に喜んでいた。しかし、勝呂が自分でも伴侶を得た今は、母の父に対する愛情を実感するとともに、その言葉の背後に、友人が暗に非難している父をかばおうとする母の気持ちが込められていたことを理解している。

③ 当時の勝呂は、指がなまってしまったという母の言葉をヴァイオリンへの決別として嬉しく聞いていた。しかし、勝呂が自分も子供を持った今は、その言葉の裏にあった現実と理想との間の葛藤に共感するとともに、子供を育てながら音楽を続けていくことの難しさに無理解な友人への不満が含まれていたことを理解している。

④ 少年時代の勝呂は、母の答えが自分への愛情ゆえに言ってくれたものだと思つて嬉しく聞いていた。しかし、勝呂が母を亡くした今は、自分の反応の浅はかさに対して後悔するとともに、その言葉が、時々癪癢かんしゃくを起こす勝呂やぐずぐず説教する父への当てつけとして友人につい漏らしてしまったものであったことを理解している。

問5

本文の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は

15。

① 「考えだったのかどうかはわからない」(16行目)や「気づいたのか、わからない」(17行目)のような表現が繰り返されることによって、勝負の状況判断に留保のあることが表されており、それとは対照的に場面の出来事については明確な事実として記憶していることが強調されている。

② 少年期と現在の両方で、「ホットケーキ」(20行目、32行目)や「アイスクリーム」(32行目、61～62行目)という共通のものが描かれることによって、西洋文化の伝播の象徴として効果的に表現されており、現在の状況と過去の記憶を比較する役割が果たされている。

③ 少年期の描写では「苦力」(58行目)や「馬車」(59行目)といった言葉が用いられることにより、現在いる東京から遠く隔たる異郷にかつて暮らしていたことが具体的な様子とともに表現されており、現在と過去の意識の空間的、時間的な隔たりが表されている。

④ 「誰もく不思議には思わない。」(66行目)や「変ったと言う者もいなくなった」(67行目)という言葉には、母がヴァイオリンをやめたことを時間とともに当然と受容している周囲の様子が表されており、当初は意外性をもって受け止められていたことが婉曲的に示されている。

問6

授業で本文を読んだNさんは、二重傍線部「その時、まるで残酷な悪戯のように勝呂の頭にあの母の死顔が浮かんできた。」という表現が最も印象に残った。これについてより深く考えるために、Nさんは「影に対して」の全文を読んでみた。Nさんは二重傍線部から抱いた疑問点二つを挙げたうえで、それぞれに関わると考えた場面を抜粋し考察したものを次の「フート」にまとめた。後に示すのは、「フート」とそれに基づいたNさんとYさんとの対話である。これらを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

「フート」

〈疑問①〉「あ、母の死顔」とあるが、それはどのような死顔か？

「抜粋①」大人になった勝呂が、かつて父から向けられた言葉と、母の死顔を回想している場面

「小説や絵など、そういう世界に入る奴は結局、みじめたらしく死んでいくもんだ」

そう、母は彼女の住んでいる貧しいアパートで誰からも看られず死んでいった。知らせを聞いて勝呂が駆けつけた時は、母の死体のそばには電話をかけてくれた管理人のおばさんが一人、おろおろとして坐っているだけだった。血の気もなく紙より青白くなったその死顔の眉と眉との間に、苦しそうな暗い影が残っていた。

〈疑問②〉母の人生はどのようなものだったのか？

「抜粋②」両親の離婚後、音楽教師をしている母から、離れて暮らしている勝呂へ送られた手紙

母さんは他のものはあなたに与えることはできなかったけれど、普通の母親たちとちがって、自分の人生をあなたに与えることができるのだと――それを今はあなたにたいするおわびの気持と一緒に自分に言いかけしているので*す。アスハルトの道は安全だから誰だって歩きます。危険がないから誰だって歩きます。でもうしろを振りかえってみれば、その安全な道には自分の足あととなんか一つだって残っていいやしない。海の砂浜は歩きにくい。歩きにく

いけれどもうしろをふりかえれば、自分の足あとが一つ一つ残っている。そんな人生を母さんはえらびました。あなたも決してアスハルトの道など歩くようなつまらぬ人生を送らないで下さい。

*アスハルトⅡアスファルト。路面舗装。

◎母は

I

生き方をした人であったと考えられる。

Nさん——私は二重傍線部を解釈するために、授業で読んだ箇所以外に「あの母の死顔」が描かれている場面と、母の生き方がわかる場面を抜粋しました。ここから母は I 生き方をした人であったと考察しました。ただし、「フート」の考察では二重傍線部全体の解釈としてはまだ物足りないように感じています。

Yさん——勝呂が「母の死顔」を想起する背景に、そのような母の生き方が提示されていることが、他の抜粋箇所も示してもらうことでよくわかりました。そうなると母のことは美化されて想起されてもよいはずなのに、なぜそれを「まるで残酷な悪戯のように」と勝呂は感じたのでしょうか。この表現について何か考えはありますか。

Nさん——確かにここは独特な表現ですよね。その点についても考えると二重傍線部の解釈が深まりそうです。結局、「母の死顔」が浮かんだタイミングと状況を踏まえるならば II と解釈できるように思います。

(i)

空欄

I

には「フート」における抜粋部分を根拠とした発言が入る。ここに入るものとして最も適当なものを、次の

① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 周囲の理解を得られずに最後まで苦しみを伴った孤独な人生ではあつたけれども、誰もが歩める安全な道ではなく、自分にしか歩めない道を進んでいこうとした
- ② その厳しさに最後はくじけてしまった悲惨な人生ではあつたけれども、誰かを模倣する安楽な道ではなく、危険と困難をとまなう独創的な道をあえて進もうとした
- ③ 家族の意向を優先して時に自分を抑えることを強いられた哀れな人生ではあつたけれども、最後まで世間的な幸福ではなく、自分が偉業を成し遂げることを追い求めた
- ④ 父の言葉が的中したかのような憐れで情けない人生ではあつたけれども、選んだ道が自分のためではなく、息子への教えになるようにと自らを律し続けた

(ii) 空欄 **II** には本文と「フート」における抜粋部分を根拠とした発言が入る。ここに入るものとして最も適当なものを、次の①、④のうちから一つ選べ。解答番号は **17**。

① まず勝呂は、現在の生活に満足しようとしているけれども、そのようなときに限って後ろめたさを突きつけられる点が「残酷」です。加えて勝呂にとって母は別居した後も自分を気遣ってくれた存在で、そのような母を独り死なせてしまった後悔をより鮮明に呼び起こすところに「残酷な悪戯」としての認識がある

② まず勝呂は、現在の家庭生活を大事にする生き方を肯定しようとしているけれども、そのようなときに限って戸惑いを生じさせられる点が「残酷」です。加えて勝呂にとって母の行為は愛情を感じるもので、時に行き過ぎた愛情としての独善性や束縛をも感じるところに「残酷な悪戯」としての認識がある

③ まず勝呂は、現在の自分の生き方を恥じる必要はないと思うこもうとしているけれども、そのようなときに限って母が責めているように感じる点が「残酷」です。加えて勝呂にとって母の教えを守れなかったことは彼に反省を迫るもので、恥の意識を突きつけてくるところに「残酷な悪戯」としての認識がある

④ まず勝呂は、今の人生に妥協しようと自身に言い聞かせているけれども、そのようなときに限って母を思い出す点が「残酷」です。加えて勝呂にとって母が示した道とは未練が残るもので、再び迷いを生じさせ簡単に自身のあり方を定めさせてくれないところに「残酷な悪戯」としての認識がある